

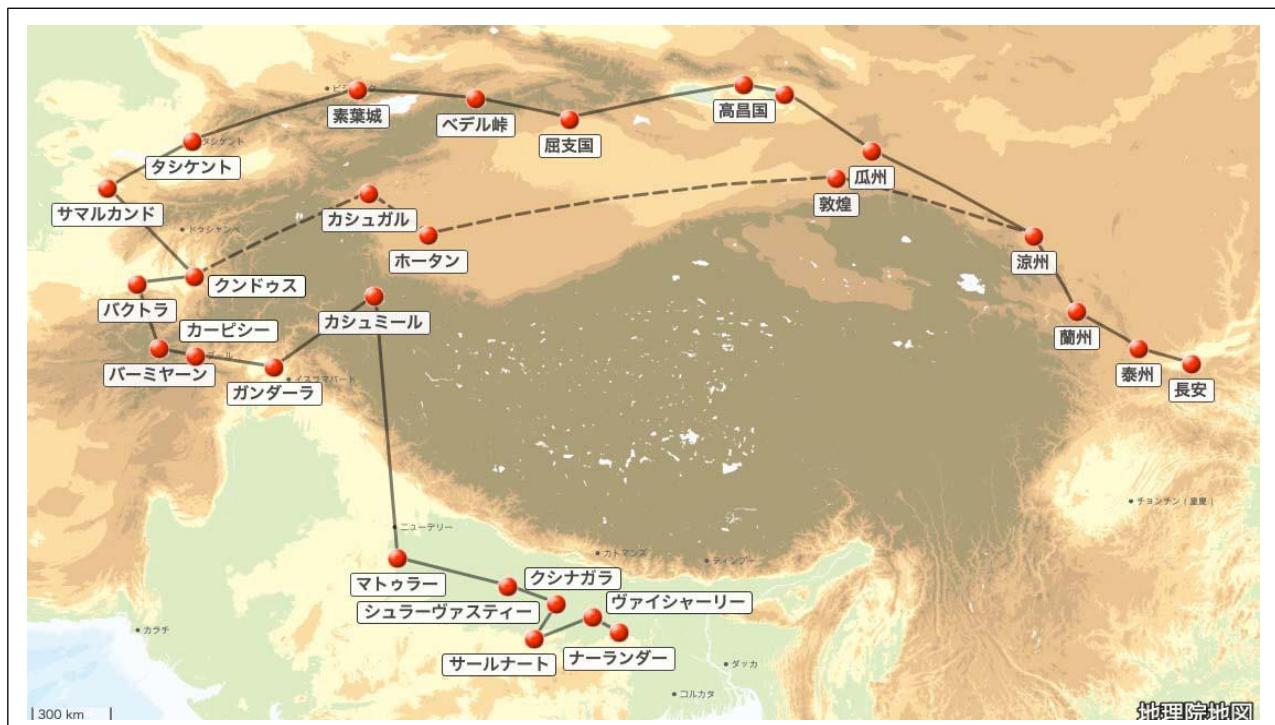


誰もが知る「西遊記」の三蔵法師こと玄奘三蔵は7世紀に実在し、仏教の教えを求めて唐の都・長安から天竺（インド）まで旅し、般若心経などを訳し、「大唐西域記」を著した。結論からいうと生涯歩いた距離は3万キロにも及ぶという。その足跡を辿って見ることにしたい。

玄奘は唐代初期602年、現在の河南省に生まれた。13歳で出家し、22歳で得度の後、仏教が興った天竺へ仏法を求めて旅立つ。国禁を犯して、629年8月に長安を出発した後の旅は、熱砂や冰山を越えての艱難辛苦の旅であった。

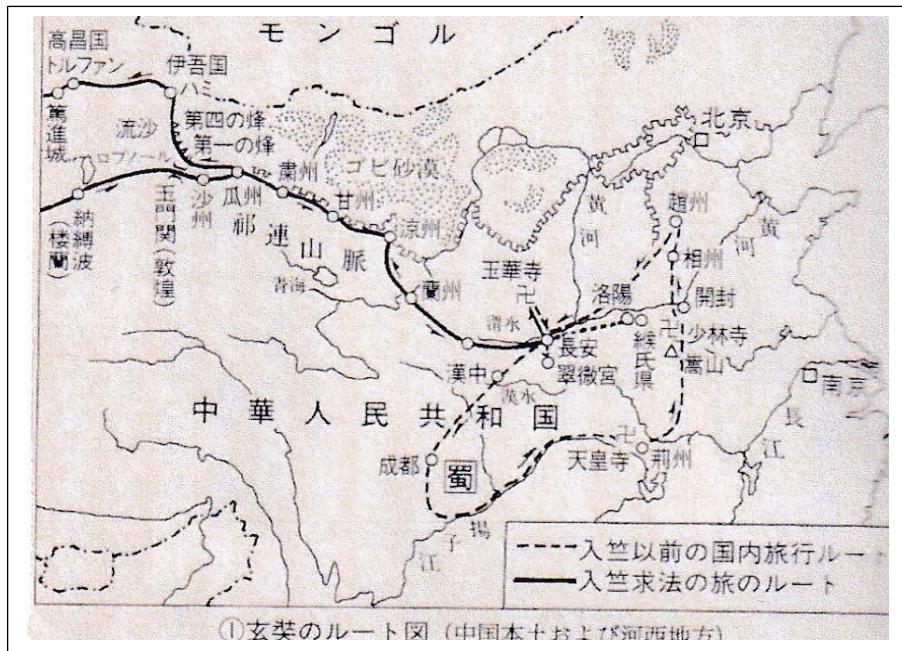
西方浄土の天竺で学び経典を入手するとの志を果たすまで引き返さないという誓いを貫き、17年の歳月をかけて目的を果たした。

645年、長安に帰国し仏典の漢訳を開始し、646年には「大唐西域記」を著した。（記憶による口述筆記で記憶違いが多々あったとされる）663年には「大般若経」600巻の訳出が完了。翌664年、王華宮において入寂した。62歳の生涯であった。下図は確実に行ったとされる地のみの地図。訳した経典は1,335巻、「般若心経」もある。



長安から蘭州で黄河を渡り安西へ。河西回廊を進む。安西からハミ、トルファンへの道で最も苦しんだのが「莫賀延蹟」（ばくがえんせき）と呼ばれる広漠とした砂漠地帯（敦煌からはハミに至る砂漠：長さ800余里・トルファン盆地）だった。空には飛ぶ鳥もなく、地上には走る獣もなく、また水草もない。このときただ一つ自分の影があるのみ、ただ觀世音菩薩と般若心経を心に念じ進んだ。100里ほど進んだが道に迷い泉が発見できない。四晩五日間は一滴の水も喉に入らず、口も喉も腹も乾ききって今にも息が絶えそうになり進むことは出来なかつた。五日目の夜半になって冷風が吹き、目があき馬も立ち上がり、数里ばかり行くと草原、池があり人馬とも蘇生することが出来た。さらに2日を経て、ようやく流砂を出て伊吾国（ハミ：新疆ウイグル自治区）に着いた。沙河中の危難は無数で、詳しく書くことは不可能に近い。伊吾王は一人でやって来た玄奘を歓迎し玄奘を高昌に送るよう命じた。（上図は長沢和俊訳：玄奘三蔵による）

伊吾から高昌まで6日の行程で高昌国に着いた。貞觀2年（628）、玄奘27歳であった。高昌国王は大歓迎し、この地に留まるよう懇願したが、遂に折れ帰途は再び立ち寄るよう願い、これから先の通過する24カ国への便利供用の要請書、金子、土産、馬30匹、クリー25人を支給した。



トルファン盆地と火炎山

下: 火炎山 西遊記のモデル



ハミ 魔鬼城跡 多数の廃寺がある

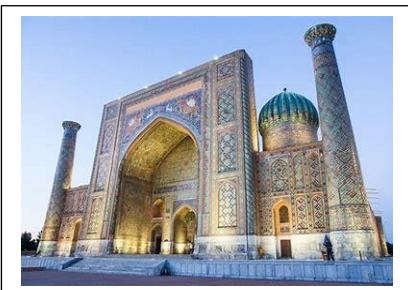


高昌国 ハミ



ペデル峰

高昌から西へ約 900 里でアグニ国に着いたが、その手前の銀山という所で、群盜に襲われて財宝を奪い去られた。そこから西へ約 900 里で屈支国に至った。ここは六朝時代に長安に来て 300 余巻の仏典を漢訳した鳩摩羅什の故郷である。この国の文字はインドそのもの、国王はインド風の名前であった。屈支から先は天山山脈中の凌山（ペデル峰）を越えて西北に進むのであるが、早春で雪が深かったので 60 日余滞在した。ペデル峰は天をつくような高峻さで、万年雪に埋もれた世界であった。氷河を越え、厳しい寒さと闘いながら進むこと 7 日間、やっと山の背後に出了が、一行中 14 人が凍死し、多くの牛馬をも失った。山の北面には周囲千余里の太湖があるので、高地でも凍結しない熱海（ねっかい）と呼ばれていた。湖水の南岸を西へ進むこと数百里で西突厥の素葉（スヤブ）城に着いた。



### タシケント（現在）

素葉城は周囲 67 里の小さな町であったが、西域各地の胡人達が集まって一つの商業都市を形成していた。遊牧民であったので、国王の宮殿も大きな天幕を張ったに過ぎなかった。数日滞在、出発に当たり、インドの西北境にカピシャ国まで送ることを約し、沿道の諸国の王宛てに便宜供与の書状と土産を託した。400 里を進んで千泉という所に着いた。

その名のごとく数百に泉池があり、無数の草花が咲き乱れ鹿の群れが歩いていた。西突厥の避暑地であった。次に周囲 89 里の小城タラス城を通過、その辺から進路を西南に転じシャーシュ国（イラン系の言葉で石の意）現在のタシケントである。

さらに西南に 500 余里下ってサマルカンドに着いた。土地は肥え、田園や樹木が連なって絵のようである。城は

周囲 20 余里、城門を入ると諸国の産物が街々に溢れるばかりの賑やかさ。国王以下、市民まで抨火教（ゾロアスター）で仏教など顧みない。国王に面会したが、初めは傲慢な態度であったが、西突厥に従属していたから、その大王の書状を持って来た玄奘一行を冷遇する訳には行かなかった。さらに西へ進み、オクサスという大河を渡り、南の活国に入った。この辺りから現在のアフガニスタン領となる。活国には一か月余り滞在し、バクトラという町を経由して天竺（インド）に入るのがよいという、この国から来た僧侶の話で、それに従いインドに入ることにした。バクトラは広々とした平野で城郭も立派であった。仏寺は 100 余り、僧徒は 3000 余、皆小乗を学んでいた。（玄奘が訪れてから幾年の経たぬうちにイスラム教を奉ずるアラビヤ軍が現れている）。



サマルカンド



バーミヤンの石仏（破壊前）



ヒンドゥークシュ山脈

玄奘は一か月余り滞在し、大雪山（ヒンドゥー・クシュ山脈）に入った。山高く谷深く、真夏でも氷が閉ざし、谷間は雪で埋まっている。その間を凶悪な群盗が横行していた。やっとバーミヤンに着いた。寒さの厳しい所で、住民は皆毛皮を着て、羊や馬をかっていた。国王は自ら玄奘を迎え、宮殿に招きもてなした。玄奘を驚かしたのは、石造の高さ 145 尺の仏の立身像であった。バーミヤンで 15 日ほど送った玄奘らは、吹雪の荒れ狂う深山の中を通ってカビシー国に着いた。この王も熱心な仏教徒で、都には寺が 100 カ所、僧侶 6 千人余という盛大さで、大乗教を信じていたが、流石にインドに近くバラモン教の崇拜も行われていた。その年の夏、玄奘はここで過ごし、玄奘らは東に進むこと 600 余里、黒嶺というのを越えて遂に北インドの境に至ったのである。

（その 2、インドに続く）

参考図書：玄奘三蔵 西域・インド紀行 長澤和俊 講談社学術文庫

玄奘三蔵 史実西遊記 前島信次 岩波新書

挿入写真は無料画像によった。